

第10回教育課程編成委員会 議事録

平成30年3月16日 (金)

14:00 ~ 15:00

司会：田中満由美

書記：藤岡恵子

< 出席者 >

山本美佐江 (社会法人 下関市社会福祉協議会 在宅福祉課長)
鳥居紀子 (公益社団法人 山口県介護福祉士会 会長)
河田洋治 (社会福祉法人 菊水会 次長)
関谷豊 (下関福祉専門学校 校長)
田中満由美 (下関福祉専門学校 教務部長)
平岡慶介 (下関福祉専門学校 教務主任)
藤岡恵子 (下関福祉専門学校 専任教員)

以上7名出席

1. 開会 挨拶 下関福祉専門学校校長
2. 委員の出席状況の確認
3. 今年度の教育目標・授業内容について
4. 各委員からの意見要望
5. その他 次回委員開催の日程について

各委員からのご意見・質問等

(委員)

・個別援助計画ができない職員が多い。介護過程の展開が重要である。介護の質が問われている。

(委員)

・個別援助計画は、施設においてそれぞれの環境の違い、利用者の違いがあるため想定してのプランは難しい。学校での基礎にプラスして現場で上乗せするのだが、指導が不十分である。

プランに基づいてできるかどうか、在宅のプランと施設のプランでは違いがある。施設においては日々変更がある。また人手不足や能力の差がありプランどおりにいかないことがある。せっかく学校で介護過程を勉強してきてもプランどおりにいかないとなると、モチベーションが下がってしまい、必要なプランから介護職員ができるプランになる。

人員確保ができていないためリスク回避が困難であり、ジレンマがある。

学校での授業どおりには行かないことも理解してほしい。

(委員)

・そのようなことが起こればモチベーションが下がってしまう。

(委員)

・選ぶ優先順位の中で、介護職員の求める質を下げざるを得ない現状がある。施設側もどこまで学校に望んでよいのか悩む。

Q. 教育目標に対しての学生の自己評価はどのように行っているのか。

A. 「実習」で各学生が自己評価を行い、記録物などは振り返りを行っている。

Q. できるできないの個々のスケールは取っているのか。個人の判断ではどうなのかを数値で表すことが必要と思う。

Q. 次回、学生の個々の到達目標に対する評価を可視化するようにする。

福祉と文化の授業について

(委員)

・若い人の言葉遣いが気になる。敬語の使い方ができていない。

(委員)

・卒業生の中でこんなのが役立つというものはあったのか

(校長)

・昭和史は、昔のことがわかってよかったとの声がある。

・介護予防はじぶんのためにもなる

・口腔ケアも役立つ

(委員)

・口腔ケアは、施設として必ず必要になるので実習に行く前に授業として取り入れてはどうか。特に2段階実習の前が良いと思う。

(教員より)

・平成30年の時間割に、実習前の授業として取り入れる。

外国人留学生について

(委員)

・留学生受け入れに対して、職員の研修も1年は必要である。

(校長)

事務長が手続きのため研修中である。1年でどこまでのレベルがくるのかわからない。

(委員)

・「自分が外国人だったら」という研修を行っている。「考えればわかるでしょ」は、通用しない。外国人と日本人の違いを理解し、説明をしっかりしなければならないということが、研修でわかった。

(校長)

・本校の教員にもそのような研修に参加させたい。次にある時はぜひ教えてほしい。

次回開催予定

8月か9月に予定をしており、早めに案内をするので出席をお願いしたい。(教員より)